瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 15
瑪瑙集 …… 28
紅玉集 …… 30
俳誌交歓 …… 31
４月号月評 …… 32
恵贈句集拝見（57） …… 34
恵贈句集拝見（58） …… 36
恵贈俳誌拝見（27） …… 38
特別作品「スイスアルプスの村を巡りてⅡ」… 40
「奥の細道むすびの地」 …… 42
琥珀集作品鑑賞 …… 44
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 45
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ …… 46
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 47
他誌転載 …… 50
姫の国父の蒼天（49） …… 52
東寺初弘法・京都水族館吟行記 …… 54
エッセイ「ゆき」 …… 56

2013/4　第85号

今月の一句

駱駝俑胡地の黄沙に逢ひし眼か　桂樟蹊子

（昭和六十年作）

中国出土の古俑展に行かれたときの作品である。駱駝俑のしばたくような細い目や、擦り傷もある色褪せた彩の名残に、ふと砂嵐や黄沙のゴビ砂漠に思いを馳せ一句を得られた。「胡地」とは万里長城より北辺の地である。戦前に新京・北京と八年を過ごされた師の中国の思い出と重なる駱駝の悲しき眼を、師は見逃されなかった。

隆　子

PDF= 俳誌の salon

雪割草

塩路隆子

百声の鳥籠となる芽吹き峪

歩行器の好きな嬰となり初節句

春霜を解かぬふるさと父母在さず

落つばきそれが火種の恋となり

守りより攻めを貫き雪割草

罫線なきノート開きぬ朧の夜

末黒野にさまよふ猫を抱きあぐる

PDF= 俳誌の salon

四月号光耀抄

塩路　隆子選

俳人の色紙を額に鴨の宿　坂上　香菜
豪雪のしまく湯沢や駒子の湯　森下　康子
火渡りの女人の素足春きざす　笠井　清佑
春立ちて香炉の耳のふくよかに　田下　宮子
白昼の決闘もどき恋の猫　和田　郁子
けふの眉歌麿めくや春の雪　西郷　慶子
大鷲の旋回みせて帰りけり　中川すみ子
熱燗やたまに艶なる話など　吉田　宏之
散歩する犬には犬の防寒着　竹内　悦子
凍て土のゆるみて靴の重かりき　山口キミコ
寒椿無垢な器に色添へる　辻　香秀
湖の駅媼自慢の初諸子　辻　知代子
一仏の不在の隙間風寒し　中井登喜子
初弘法蕎麦猪口に見る呉須の冴え　橋本　靖子
臘梅のさはに香れる安土郷　増田　一代
頭みぎ五匹いち連目刺焼き　松岡　和子
冬荒れの湖北の水面鳥の舞　松田　和子

PDF= 俳誌の salon

梅咲ける岬の分校小豆島　宮越　久子
マフラーの中で呟く恋のうた　宮田　香
薄明の立体曼荼羅雪もよひ　山崎　里美
梅日和ダックスフントの足忙し　和田森早苗
節分の主菓子鬼とお多福と　飯田美千子
駄々っ子に戻る夫ゐて春の風邪　石川かおり
指に触れコートに残る捩り券　伊東　和子
冴えわたる技や神事の的射抜き　伊藤　和子
鴉鳴く声ののびやか春隣　伊藤　純子
唐詩選うろ覚えなり山眠る　大越　義雄
黒づくめの人版画めき春の雪　小澤　菜美
臘梅の香を活けし床尉と姥　川崎　利子
冴返る大歳時記を繙けば　北尾　章郎
鰤大根炊きて生れは北の国　小西　和子
銀閣に深まる風情雪の朝　坂根　宏子
笛の後おんぶされゆく獅子頭　佐用　圭子
沈黙は金なりふふむ冬木の芽　塩路　五郎
大寒やヒマラヤの塩よく利きて　鈴木　照子
山焼きの龍の昇天闇焦す　国包　澄子
静寂なる枯山水に雪の華　片岡久美子

PDF= 俳誌の salon

臘梅や老舗蕎麦屋の出入口　長濱　順子
句仏忌や御殿引手の品のよさ　福本すみ子
宙を舞ふ狐忠信初芝居　木戸　宏子
金堂に仏の慈悲の初音聞く　藤見佳楠子
東風吹きて匂ひ遺せる北野宮　山本　孝夫
鬼役の園長先生豆の弾　西田　史郎
晦日夜を商ふ声や厄払ひ　津田　富司
約束をせしごと庭に蕗の薹　杉本　綾
伝来の畑に感謝や鍬始　笹井　康夫
いづくより梅の香乗せて路線バス　関根ひろみ
束の間のはかなき舞や六つの花　大松　一枝
冬灯す琵琶湖大橋弧を描き　三川美代子
停滞の脳への活や寒卵　井口　淳子
立春の空へ弁慶飛び立てり　渡部　法子
立春の木のこゑを聴く宮大工　阪本　哲弘
目白らは小枝わたりて恋さがし　竹内喜代子
柚子風呂にひと日はんなり過しけり　高屋喜美子
雑踏に紛れる聖歌社会鍋　田中　浅子
山門の構図決まれり寒椿　田中　久子
異国にて温うして産め寒土用　谷口　俊郎

小豆粥夫の遺品の箸おろす　十時　和子
鷽替の太鼓一打に列動く　中村ふく子
足さばき華麗な蹴鞠粉雪舞ふ　西垣　順子
灰色の雪雲厚し奥丹波　能勢　栄子
公園に彩そふる寒椿　秦　和子
泰然と出番待ちをり冬欅　藤本　秀機
寒の日の目覚しウオーク池巡り　前川ユキ子
冴返る無人の駅や常夜燈　松田　洋子
牛若の産湯井辺り草萌ゆる　山内　節子
佇めば木々の囁き冬木の芽　山口　和子
鉄塔に威儀正しけり初鴉　山田　愛子
苔むせるマリア灯籠梅三分　横田　矩子
小春凪紀淡海峡船繁く　粟倉　昌子
冬晴や湖国稜線真白なり　池田加寿子
湯豆腐や会話のをどる湯気の中　板倉　安正
行者橋踏みはづさずに寒の川　伊庭　玲子
日溜りに遊女の碑あり福寿草　大島みよし
受付に愛でる紅白餅の花　大谷　信子
初糶のまぐろ驚く最高値　桂　敦子
うそ泣きを覚えたる孫春浅き　河田　孝子
妣のゐて昔なつかし桐火鉢　小林　久子

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

初諸子

坂上　香菜

春雪に確と湖北の米どころ
山羊を連れ雪の湖岸を散歩人
七輪で炙りて食めり初諸子
剥製の鳥の瞳や雪明り
俳人の色紙を額に鴨の宿
鴨鍋や暮石の句ある箸袋
丁字屋の雪解雫に打たれけり

雪国

森下　康子

トンネルを抜ければ越後雪霏々と
豪雪のしまく湯沢や駒子の湯
きき酒の酔ひふはふはと雪催
雪国の二合握りや米どころ（爆弾握り）
露天湯へ夜毎通へる雪女郎
束の間の青春想ふ寒の紅
春立つや影も踊ってゐるやうに

火渡り

笠井　清佑

春の夕オニオンスープ匂ひ立ち
白梅の咲く一輪に陽を溜めて
寒明けて関節の音緩みけり
立雛の金の袴や一刀彫
みちのくへ行かむと想ふ春の旅
生き方を問はれて「簡素」暮遅き
火渡りの女人の素足春きざす

PDF= 俳誌の salon

香炉の耳

田下　宮子

梅二月彩鮮やかに朱雀門
修禅寺の欠けたる古面余寒なほ
竹さわぐ頼家塚の冴返る
霜の朝手を振りながら子は発てる
被写体のにはか舞妓や梅ふふみ
花苗の彩ふえ花舗に春来る
春立ちて香炉の耳のふくよかに

猫の恋

和田　郁子

寒風に乗りし神鈴塀を越え
愛用のバッグへ三度追儺豆
鬼やらひ世界遺産といふ社
皿人参食む神馬の瞳春きざす
白昼の決闘もどき猫の恋
あはあはと積りて融けて春の雪
新築の早き工法山笑ふ

春の雪

西郷　慶子

をさな名を呼び合ふふたり春に逢ふ
妣の着物嬰のふとんに縫ひ直す
教へ子に奢られてゐるおでん酒
喪の真珠はづしてよりの春の雷
おとうとに読める童話や春ごたつ
若き日の母のこと聞くショコラの日
けふの眉歌麿めくや春の雪

鮎を挿す

中川すみ子

鮎を挿す後継者なき老の舟
大琵琶の朝日に映ゆる木の芽かな
丸刈りの二十歳を祝ひ弓始
大鷲の旋回見せて帰りけり
門口に瑠璃の輝き竜の玉
カーナビを頼り早春アイランド
早春の冨士を引き寄せ指定席

PDF= 俳誌の salon

寒椿

吉田　宏之

初詣幸先の良き当りくじ
待春を黙し語らず四畳半
臘梅の蕾開きて木々めざむ
日向ぼこ特等席に猫二匹
熱燗やたまに艶なる話など
黙々と登りて茶屋の寒椿
許すまじ非業砂漠の冬銀河

防寒着

竹内　悦子

麦の芽の伸びゆく大地減反地
雪解けの水滔々と里坊へ
散歩する犬には犬の防寒着
眉薄く描きて春の外出かな
春の雪アダモの歌の遠くなり
桟橋に帰帆を待てる百合鷗
建国日児らの未来を憂ひけり

凍土

山口キミコ

凍て土のゆるみて靴の重かりき
比良裾の町は除雪の嵩並べ
昨夜の鍋のはらからなりや鴨の群
奥琵琶の菅浦隠し雪しまく
春立ちてばね人形の浮かれ跳び（手作り教室）
おしくらまんぢゅう弘法さんの人出かな
尊きや大師縁日寒の晴

河豚三昧

辻　香秀

如月は季節のせめぎ合ひの日々
織部皿画布と見立てて河豚三昧
寒椿無垢な器に色添へる
薄氷ばりばり踏みて反抗期
湯ざめして恋のをはりのここちかな
壬生に行き吉田へ詣で節分会
恵方巻黙し食べては福招く

PDF= 俳誌の salon

初諸子　　辻　知代子

旧正月のフランス料理主婦の贅
下萌の土手に弾める雀どち
待雪草乙女の像を遠囲み
遠景に陽光まぶし雪の比良
湖の駅媼じまんの初諸子
百の実にふくら雀の鳴き群るる
山宿の膳に添へられ年の豆

通し矢　　中井登喜子

餅つきや母の差配を引き受けて
荒神へ自信の手こね鏡餅
願ひつまし六十回目の大旦
初空や賑はひ遠く飛行船
一仏の不在の隙間風寒し　（三十三間堂三句）
息呑めば空気貫く初矢かな
通し矢やたすきを凛と新成人

寒　卵　　松岡　和子

ちりちりになりて切干香を深め
雪はたく人影映す大戸かな
頭（かしら）みぎ五匹いち連目刺焼く
母恋し半分づつの寒卵
寒肥や木々の好みを確かめつ
思春期や母を疎みて春炬燵
手塩てふ愛情注ぐ酢茎漬け

蕎麦猪口　　橋本　靖子

初弘法蕎麦猪口に見る呉須の冴え
山焼きの火付けに走る消防士
歯朶の杜悪戯書きを多羅葉に　（手紙の木）
鳶啼きて俯瞰や伊根の海ぬくき
真珠の指輪はづし笹掻き寒厨
砂盛りの作務衣の僧や梅ふふみ
花菜食む良くも悪くも昭和好き

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

お山焼　国包　澄子

榾組の一気に崩れ厄払
火渡の熱気鎮めて春の堂
葉ぼたんの繊密の渦のゆるみ初
山焼きの龍の昇天闇焦す
万蕾にゆさぶりかける春の雨

東山界隈　片岡久美子

観音の法水たまふ淑気かな
土佐志士の寓居跡なり月冴ゆる
大閤の大仏殿址寒鴉
静寂なる枯山水に雪の華
甦る会津の意気地竜の玉

臘梅　長濱　順子

歴代の座主並ぶ墓日脚伸び
臘梅や老舗そば屋の出入口
煙抜きの町家の甍冬茜
青空へ拳突き上げ枯木立
冬帽子見知らぬ人に遠会釈

寺障子　福本すみ子

頬なでる風の春めく夜の道
個包装切る手間いらぬ鏡割り
なりはひの手職と云へど手の荒るる
手の荒れる埃まみれの寺障子
句仏忌や御殿引手の品のよさ

春芝居　木戸　宏子

宙を舞ふ狐忠信初芝居
襲名の役者の凛々し春芝居
冬晴の湖を一望足湯かな
鄙の町の三寺（さんでら）まゐり雪積もる　（飛騨古川）
寒風に爆ぜる篝火三寺詣

PDF= 俳誌の salon

紅玉集

さむいけどはっぴょうかいはがんばるぞ　土井ここの
すいぞくかんイルカがバチャンつめたそう　（五才）
（江ノ島新水族館）
ふゆのふねおおきなはしをくぐります　（お台場）

バレンタイン友チョコ作り交かん会　森下　千聖
スキー場れん休中日太こんざつ　（小三）
自転車のサドルに氷つめたいな

パンケーキ完食したけど寒かった　土井ほのか
冬の海鰯の群れが波起こし　（小四）
バレンタイン友チョコ以外も渡します

休みでもカゼより心配給食が　廣瀬　将也
まきずしはだまって食べるのむずかしい　（小四）

キャンプイン野球始まり楽しみだ
春近しひとつ見つけたふきのとう

はじめてのバレンタインのチョコクッキー　塩路　彩奈
きん張の入じゅくテスト寒かった　（小五）
とび箱の八段とべた白い息
大なわとびうまくいったよ五十回
バスケット教える選手あたたかい　（元パラリンピック選手）

葉の上に積った雪がおばけのよう　鈴木　香奈
白一色まるで異世界雪の町　（小六）
冬の朝朝日の赤がお楽しみ
節分の海苔巻きガブッとかぶりつく
バレンタイン悪戦苦闘の菓子づくり

雪煙あげて滑走ハチ高原　塩路　遼
ネックウォーマーまでも凍りて滑降す　（中一）
すき焼を腹一ぱいに仲間たち
ふくろうの声に目覚める午前二時
吹雪くなか上るリフトの零下五度

PDF= 俳誌の salon

四月号月評

塩路　隆子

いつも月評を書きながら、ついのめり込んで行く感動を覚える。書くほどに皆さまの句に惹かれる自分を感じることが多い。ここのところ巻頭をみると二か月位、同じ人たちが巻頭周辺を固めている。同人制を布かず定位置を作っていないところから、琥珀集の五人ないし十人ほどの句は素晴らしい。同じ人でも外せないものがある。なるべく新人を起用したく思うが、人々の感性の周期みたいなものをそこに感じながら月評を書いている。

俳人の色紙を額に鴨の宿
鴨鍋や暮石の句ある箸袋　　坂上　香菜

湖西線近江今津駅で下車。徒歩六分のところに、三〇〇年の伝統と天然の真鴨を味わうことの出来る丁子屋旅館がある。作者はそこを訪ねられた句を発表されているが魅力ある冬の吟行地である。行ってみたいと言う思いもあって今月の巻頭を飾る一連の句に惹かれた。旅館には有名俳人の色紙が掲げてあり、箸袋には右城暮石先生の句が印刷されているようである。俳句を志すものにとっては訪れたくなる臨場感あふれる句に仕上がっている。羨ましい限り。

豪雪のしまく湯沢や駒子の湯　　森下　康子

川崎市にお住まいの作者であるが平素はほんの身ほとりの句を上手く表現されるお一人である。今回は越後の湯沢温泉を訪れられたときの吟行句である。そこは舞踊研究家島村と、芸者駒子と妹葉子との間の人間関係の微妙な美しさを描いた、川端文学の代表作「雪国」の舞台となっている。激しい雪の湯沢温泉には「駒子湯」が設えてある。作者は雪国の書き出しの一節などを口ずさみながら駒子の湯を堪能されたことであろう。まるで川端文学のヒロインの気分を呼び戻す気持ちさながらに。

火渡りの女人の素足春きざす　　笠井　清佑

奈良にお住まいの作者であるから、なら町にある元興寺の護摩焚きと火渡りの荒行を詠まれた句であろう。はじめに矢を六本放ち四方に結界を張り、太鼓の鳴るなかを護摩木が燃え上がります。その後木材を火伏し、組み直しお札を手に火渡りを始める。作者が特に感じ入られたのは、火渡りをする女性の素足。「春きざす」の季語の選択も抜群である。（以下略）

PDF= 俳誌の salon